

第37回

「地球温暖化」をはじめとする環境問題がますます身近になる一方で、世界の国々が賛同できる国際枠組みの構築は困難な状況にあります。

このような状況下で対策が急がれる中、国際社会はどのように取り組むべきなのでしょう。

CSRの最先端アメリカでの実体験をもとに日本企業向けのCSRコンサルティングを行うコーポレートシチズンシップ代表の雨宮氏から世界で行われている地球環境問題解決への取り組み等について、ご紹介いたします。

コーポレートシチズンシップ 代表取締役 雨宮 寛氏



インドネシア・バリ島の持続可能な成長

2013年最初の寄稿となります。本年もどうぞよろしく願いいたします。

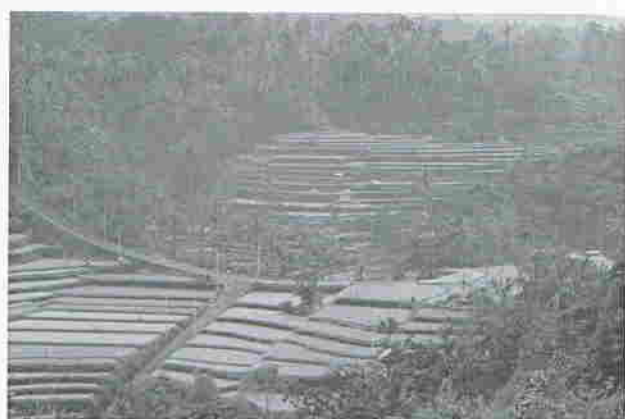
私は昨年11月末に、マイクロファイナンス事業の一環でインドネシア・バリ島のマイクロファイナンス機関数社および最終的な借り手である起業家や零細事業主の人々を訪れる機会がありました。インドネシアでも観光業がとくに発展しているバリ島は、空港から島の中心部まで、道路建設、高層ビル建設、地下鉄建設などものすごい勢いで成長していることを感じる街でした。バリ島は今年のAPEC開催地です。2、3年後に再び訪れたとしたら、全く新しい都市が出来上がっているのではないかと思います。

インドネシアは世界第4位の人口大国で、日本の人口の約2倍の2億4千万人ほどの人口です。私が中学受験の勉強をしていたころは日本とインドネシアの人口は同じくらいだったと記憶しておりますので、人口の増加とともに著しい経済成長を遂げてきているというのがわかります。しかし、1997年のアジア通貨危機のような経済低迷期や2004年のスマトラ島沖地震やその後の大規模な余震など、国家存亡の危機的な状況に何度も直面し、乗り越えてきました。また、21世紀に入り、急速に民主化の流れが高まり、現在の大統領は直接選挙による初の大統領です。歴

史的にも良い面（経済活動）、悪い面（第2次世界大戦前後の日本軍）で日本とはつながりが深い国の一つです。

私はハーバード大学大学院留学時代に、ケーススタディでバリ島におけるグリーン・レボリューション（1950-70年代に飢饉や貧困にあえぐアフリカやアジアで起こった農業革命）を研究する機会がありました。水田の土壌や肥料、品種改良、稲作方法など多くの改良や進化がみられたのですが、その中でも、日本の稲作の技術や水田の管理、灌漑設備のノウハウが生かされました。イスラム教徒の多いインドネシアの中で、バリ島はバリネーズ・ヒンドゥー（バリ島ヒンドゥー教）が島民の大半に信仰されています。バリネーズ・ヒンドゥーではお寺に水路を引くようなところが多く、水を大切に作る習慣が昔からあったようです。そのため、この次ページの写真のような水田が広がり、維持されています。私はこの水田を前述のケーススタディの研究をした際に、バリ島におけるグリーン・レボリューションの代表的な水田として古い写真でみることにありました。今回は仕事で訪問したバリ島にあるマイクロファイナンス機関の借り手のところに訪れる際、偶然この写真の風景に遭遇したのです。6、7年前に研究してい

た当時は、まさか自分がこの水田を訪れるということはないだろうと勝手に思っていたのですが、今回、この地を訪れることができ感無量です。約50年前に飢饉や貧困問題を解決するために、主食である米を多くの人々に行き渡らせることからスタートした水田が、現在も、しっかりと稲作に利用されていて大変嬉しくなりました。ここで掲載している2つの写真は、バリ島で最も高いアグン山の麓に広がる水田の景色です。自然との調和も美しく、日本の棚田も美しいですが、この棚田も魅力的です。



水田風景



棚田と雲に隠れているアグン山

また、この現地のマイクロファイナンス機関の人によると、バリ島の島民は、日本人の多くが仏教と神道を信仰と生活で使い分けられているように、バリ島ヒンドゥー教と仏教を信仰と生活で使い分けていて、マイクロファイナンス機関からお金を借りる人たちは、自分が死んだ時に、良い来世にいきたいという思いが強いため、現世では勤勉勤労に励み、きちん

と借りたお金を返し、悪い行いをしないように努めているということです。この仏教の考え方はカンボジアで現地のマイクロファイナンス機関を訪問した際にも、同じようなことを聞きました。仏教を信仰している人は、死ぬときは天国に行きたいので、現世を一生懸命頑張るようです。この頑張りも、借りたものは期日までにきちんと返す、ということに結び付いているのだと思います。

急成長を遂げているインドネシア。その中でもバリ島は日本でも観光地として非常に人気のある地域です。私のバリ島の関心は、水田とマイクロファイナンスという観光とは全く違う分野ですが、今もしっかりと利用され、自然と美しく調和した棚田や信仰を大切にしていることなど、経済成長に浮かれるのではない、身の丈に合った経済活動を地域の発展とともに進めていくバリ島の人の思いが強く伝わってきました。



現地マイクロファイナンス機関の人たちとヒンドゥー教寺院前

略歴

コーポレートシチズンシップ代表取締役。DWMアセット・マネジメント；DWMインカムファンズ日本代表。明治大学公共政策大学院兼任講師。CFA協会認定証券アナリスト。NPO法人ハズオン東京理事。コロンビア大学ビジネススクール経営学修士およびハーバード大学ケネディ行政大学院行政学修士。クレディ・スイスおよびモルガン・スタンレーにおいて資産運用商品の商品開発を担当。2006年コーポレートシチズンシップを創業。「あなたのTシャツはどこから来たのか？」(ビエトラ・リポリ著 東洋経済新報社)「暴走する資本主義」(余震 そして中間層がいなくなる)(ロバート・ライシュ著 東洋経済新報社)などを翻訳。「アショカDVD・社会起業家シリーズ」監修。